

三菱重工業株式会社長崎造船所150年の歩み



三菱重工業株式会社

執行役員 長崎造船所長

わ に まさ ふみ
和 仁 正 文

1975年東京大学大学院卒業。
同年三菱重工業(株)入社。11年間本社勤務の後、1986年長崎造船所へ。
一貫して火力発電所の蒸気タービンの設計に従事する。
2001年4月火力プラント設計部長、2004年4月長崎造船所副所長を経て、
2006年4月長崎造船所長、2007年4月執行役員長崎造船所長に就任。

1. はじめに

三菱重工業(株)長崎造船所は、安政4年(1857年)10月10日、徳川幕府によってわが国最初の艦船修理工場「長崎鎔鐵所」として鮑の浦の地に起工されてから、本年10月10日に150周年を迎えました。当所事業の現状は、従業員約6千人、年間生産高約4千億円で、そのうち3割がLNG船、LPG船、艦船をはじめとする造船事業、6割が火力発電プラント・太陽電池・風力発電などの原動機事業、残る1割が航空・宇宙他の事業です。現在当所を取り巻く事業環境は、世界的な好況が続

く一方で、技術革新やグローバル化のスピードが速まり、企業間で生き残りのための競争がますます激しくなっており、次の時代の事業環境を見据えた経営を行う重要性が高まっています。そういう意味で、時代の変遷、事業環境の変化があったにもかかわらず、これまでの間、国内や海外のお客様に満足いただける製品をこの長崎の地から供給し続けられたことを大変感謝しております。150周年の歴史は、決して平坦な道のりではありませんでした。明治、大正、昭和、そして平成と幾多の危機を迎えましたが、その度ごとに諸先輩方の英知と不撓不屈の精神により無事乗り



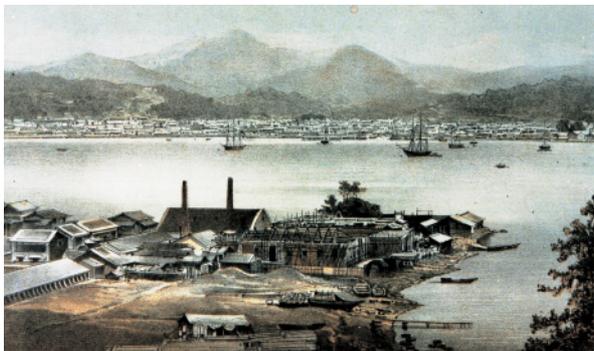
長崎造船所本工場全景

切り今日に至っており、諸先輩へ敬意を表したいと思います。

また、これもひとえに変わらぬご愛顧をいただいているお客様、ビジネスパートナー、地元長崎の皆様のご理解とご支援の賜物であり、心から厚くお礼を申し上げます。

2. 今日までの歩み

鎖国時代が終焉を迎えると、徳川幕府は外国への唯一の窓口であった長崎にオランダ寄贈の木造軍艦「観光丸」を練習艦とする海軍伝習所を置き、さらにその修理工場として飽の浦に長崎鋸鐵所の建設を起こしました。安政4年（1857年）10月10日、長崎造船所発祥の日です。



150年前（1860年）の当所



三菱の創業者・岩崎弥太郎

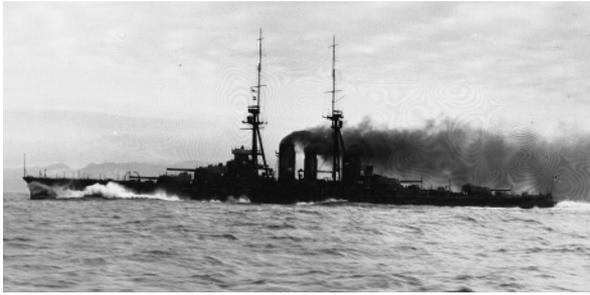
その後維新とともに施設は明治政府が接収し、明治4年（1871年）には長崎造船所と改称されました。明治12年には東洋最大の立神ドックが完成しました。三菱の創始者、岩崎弥太郎は、明治政府から造船所の土地、設備一切を借り受け、さらにこれを買収して造船業に乗り出します。そして明治20年には最初の鉄製汽船が竣工しました。「夕顔丸」です。



立神船台での「夕顔丸」の進水式

続く明治末までは、構内鉄道、発電所建設、ドックの建設や延長など近代化への基礎を築いた時期です。この時代に造られた代表的な船が日本郵船の欧州航路貨客船「常陸丸」。またサンフランシスコ航路の客船「天洋丸」「地洋丸」「春洋丸」は当時わが国としては空前の最優秀客船でした。

大正時代には設備の近代化が完成し、ほぼ今日の長崎本工場の形が出来上がります。大正3年、第一次世界大戦が起こり、造船景気となり船腹の需要が世界的に増加します。大正6年には造船部門が独立し三菱造船株式会社長崎造船所と改称しました。この時代には民間造船所では初めての建造となる巡洋戦艦「霧島」や戦艦「日向」などが建造されました。



巡洋戦艦「霧島」

昭和に入ると、世界的不況により工事量不足が続きましたが、昭和4年、世界屈指の優秀船と言われ、「太平洋の女王」とも称された日本郵船サンフランシスコ航路貨客船「浅間丸」や「龍田丸」が建造されました。



豪華貨客船「浅間丸」

その後、工場の新設や増改築など生産体制の拡充が進み、昭和14年には大阪商船の貨客船「あるぜんちな丸」「ぶらじる丸」などが竣工しましたが、戦時下という時代を反映し、わが国最大の豪華客船として計画されていた「樫原丸」は建造途中で航空母艦「隼鷹」に改装され、「あるぜんちな丸」「春日丸」などの豪華客船も空母に改造されました。また、第二船台で極秘裡に建造されていたのが、昭和17年8月に竣工した69,500排水トンの巨大

戦艦「武蔵」でした。当所は昭和19年8月11日初めて空襲の被害を受け、その後も再三の空襲を被り、翌年8月9日の原子爆弾投下により工場の機能はすべて停止し、終戦を迎えました。



空襲により被災した工場

昭和19年には4万8千人を数えていた人員は、終戦後の昭和21年末には1万4千名余となりました。工場では大型船舶ではなく、家庭用品、農機具の製作や車両、機関車の補修、漁船の建造などが続きますが、次第に捕鯨母船、鉄道連絡船、小型貨物船などを建造。修繕船も国内外の改造・修理が相次ぐようになります。

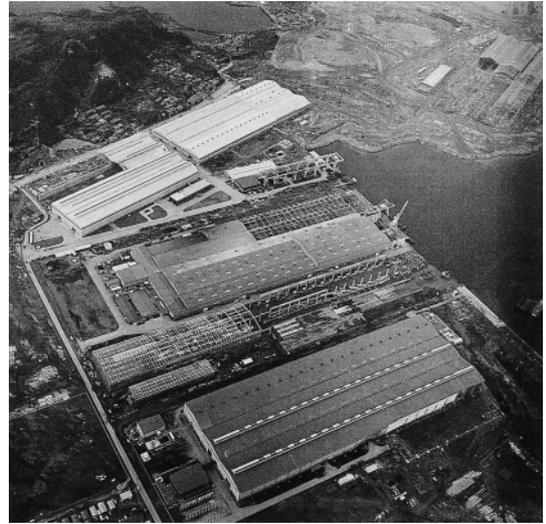
昭和25年、三菱重工業株式会社は3社に分割され、「西日本重工業株式会社社長崎造船所」となり、昭和27年には「三菱造船株式会社社長崎造船所」となります。この時期は輸出タンカーを中心とする新造船部門が伸長。また機械部門のディーゼル機関、タービン、ボイラなども順調に実績をあげる中、昭和32年創業100周年を迎えました。



50年前（昭和32年）の当所

時を同じくして、日本は東京オリンピック開催を頂点とする経済成長の時代を迎えます。造船部門は、輸出船ブームの中、造船技術の向上と併せ、優れた船用ボイラやタービン、ディーゼル機関の開発が進んだことにより、昭和31年から3年間、単一造船所として年間進水量世界第一位となります。この間代表的な船舶で、昭和36年に竣工した「ネス サブリン」は、当時世界最大のマンモスタンカーで、わが国最大の船用ボイラ、新規開発の球状船首や超肥大船型の採用など、最先端の造船技術を駆使した大型船でした。

昭和47年、最新鋭の造船工場として、「香焼工場」が完成。昭和40年から昭和51年までの12年間連続で、単一造船所の進水量世界一を続けます。機械部門でも、電力需要の増大に伴い、大容量発電プラントの建設が活発化、深堀・香焼地区に世界最新鋭のボイラ工場を建設し、当時わが国最大の東京電力袖ヶ浦火力発電所の超臨界圧ボイラをはじめ、多数のボイラを製作した他、自動車産業の発展と道路網整備の急進展に伴い受注量を拡大させたタイヤ機械も、事業規模を伸長させました。



昭和46年ボイラ工場完成



昭和47年香焼工場完成

昭和48年秋の第一次石油危機を契機に造船業界は構造的な不況に陥ります。手持ち工事量は激減。建造船種は、それまでの大型タンカー一色から、LNG船・LPG船の他、貨物船、自動車運搬船など多種多様になっていきます。こうした状況にあって経営を支えたのは、機械部門、とりわけ火力発電プラント部門でした。国内では石油に代わる石炭、LNGなどの発電プラント需要が増大し、また産油国などに向けて輸出も急激に拡大し、イラク火力発電プラントをはじめ、中東諸国、中国、スペイン、南米諸国向けに受注量を伸ばしました。



昭和56年「電源開発松島火力発電所1・2号」引渡

しかし、昭和60年秋以降の急激な円高により、輸出比率の高い長崎造船所は大きな打撃を受けます。造船部門は、徹底的なコスト低減と新技術の開発・早期製品化、資材の海外調達要員増強、自動化装置やロボットを導入した工作法の改善など、あらゆる努力を続けました。

昭和60年には上五島石油備蓄向け貯蔵船の建造が香焼工場が始まり、また平成2年には世界最高レベルのグレードを持つわが国の歴史上最大の客船「クリスタルハーモニー」（現飛鳥Ⅱ）、さらに翌3年には日本国籍のクルーズ船「飛鳥」が竣工しました。

その他、固体電解質型燃料電池、石炭ガス化複合発電など新しいエネルギー利用技術の開発にも取り組みました。

最近の10年間は、世界的に競争が一層激化し、事業環境が厳しさを増す中、新たな長崎造船所づくりに一歩ずつ前進した時期でした。

大型客船「ダイヤモンドプリンセス」（新「サファイアプリンセス」）では、艤装工事中の平成14年に、火災を発生させましたが、建

造を継続することで船主の了承が得られ、厳しい工程ではありましたが、竣工に至ることができました。平成16年には新日本海フェリー向けに世界最大のフェリー「はまなす」「あかしあ」を引き渡し、平成17年には地球深部探査船「ちきゅう」が竣工、「女神大橋」も開通いたしました。この他、LNG船、LPG船、大型自動車トラック運搬船など、多くの新たな船種を建造しました。



サファイアプリンセス

機械部門でも、輸出市場で欧米メーカーとの受注競争がさらに熾烈化しており、画期的コスト低減と技術開発に総力で取り組みました。船用機械は主タービン、ボイラ、発電機用タービンなどで世界のトップシェアを維持しています。

また、近年は新エネルギー分野の製品開発・製造に注力しています。風力発電は市場が拡大し国内外で大型商談が相次いで、風車の大型化も進みました。このため平成16年、香焼の工場の一部を改装し、風力発電設備の一貫工場を整備しました。また太陽電池は平成7年からアモルファス太陽電池の開発に着手し、平成14年に諫早工場で生産を開始しました。

この他、次世代の事業の柱に育てたい燃料電池、石炭ガス化複合発電などの開発も着実に成果を得ています。

以上、当所150年の歩みを駆け足でご紹介しましたが、詳細については是非一度、当所「史料館」へお訪ね頂くことをお勧めします。



太陽電池パネル



2.4MW風力発電装置

3. 地域の皆様とともに

当所事業は従業員のみならず、今年創立103年を迎えた長崎研究所の他、グループ会社、ビジネスパートナーとともに運営してい

ますが、人数にして約1万人が従事しており、その家族も含めると多くの関係者が地域の一員として暮らしております。当所が永らくこの長崎の地で事業を続けられたのも、地域の皆様のご理解とご支援があつてのことであり、当所も地域の一員として共に発展の道を歩みたいと思います。

そのためにも、事業に関連しては、新規事業の立ち上げや設備の維持更新のため一定規模の投資を継続していきます。事業外の活動では、スポーツの面で硬式野球部、マラソン部、ラグビー部の活動や三菱重工体育館の運営などを通して地域スポーツの振興、話題提供を行います。三菱病院は地域の患者様にますます愛される病院となるように運営していきます。

去る10月10日には創業150周年記念式典を長崎港を見下ろすグラバー園内で開催しました。ご臨席いただいた方々も含め、各方面から多大なご祝辞をいただき、誠にありがとうございました。

創業150周年を機に、地域の発展に少しでもお役にたてるよう国土交通省・長崎県・長崎市などと共同で技術研修センターを設置したほか、当所製品の太陽電池パネルを公共施設で活用いただく予定です。

また、8月に工場見学会を開催し、たくさんの方にご見学いただきました。10月からはこれまで以上に史料館をご利用いただけるよう「専用門」を設けました。これからも地域の皆様とのふれあいの場を増やしていきたいと思っています。

4. おわりに

ますます競争が激しくなる時代に対して、先人たちが残した経験を生かしつつ、150年の歴史に新たなページを書き加えていくことが私たちの使命であると、決意を新たにしていく次第です。私たちの社是の1つ「社業を通じて社会の進歩に貢献する」という経営理念を実現しながら、更なる50年後に向けて、グローバル企業として飛躍、成長し続ける長崎造船所を目指して挑戦していきたいと思えます。今後とも皆様方のこれまでと変わらぬご理解、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

ご案内

三菱重工業(株)長崎造船所「史料館」

1. 公開日時

平日の午前9時～午後4時30分

(土・日・祝日など、長崎造船所の休業日は休館、会社行事などで見学をお断りする場合もあります)

2. 見学申込

希望者は事前にご予約願います。

長崎市飽の浦町1番1号

TEL 095-828-4134、FAX 095-828-4124

3. その他

入場無料。写真撮影は館内のみ可。

史料館ホームページは次のURLへ。

<http://www.mhi.co.jp/nsmw/html/siryoum.htm>

